

鵠 沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 5 5 号

1 9 9 0 年 9 月 1 1 日

鵠沼の光と影 その一 吉田 興一

鵠 沼 を 語 る 会

鵠沼の光と影 その一

吉田 興一

ここに連載する一連の作品は、昭和54年から約2年、市民集会の開始により廃刊したミニコミ誌、「くげぬま」に載せたもので、残しておきたく、「鵠沼を語る会」機関紙に記録させて頂く。なお、編集に携わった方々は、三輪梅三郎氏、かつてこの鵠沼を語る会をリードされた伊藤節堂氏及び編集員募集に応募された藤沢在住の二人のご婦人である。私もその一翼を担ったので、ご縁があり、会員各位のご了承を得たい。

私の鵠沼

作家 阿 部 昭

私が鵠沼に住んでそろそろ45年になる。昭和9年に、海軍の軍人だった亡父の任地広島で生まれ、翌10年の春さきに、はるばるとこの土地にやって来た。自分が当時の高座郡藤沢町に住みついた正確な日付を知りたいと思い、老母にたずねてみたが、はっきりしない。母の記憶では、なんでもまだ海の風が肌寒いところで、赤ん坊の私に白い毛糸のブーケを着せて、藤沢駅に降り立ったことを覚えているという。

最初は江ノ電の鵠沼のほうにいたが、やがて西海岸に家を建てて移った。文字どおり朝な夕なに波の音を聞きながら大きくなったわけで、すぐまじかに海があるという感覚は意識するにせよしないにせよ、私の思考や文章と切り離せない。よそのどこの土地へ行っても、そばに海がないと、なんとなく落ち着かない。それもこの相模湾の海でないと安心できないというふうで、結局いつまでもこの鵠沼にへばりついているのでせある。出生地を問われると、広島と答えることにしているが、ふるさとはこの鵠沼であると言ってよい、したがって、私の書くものも、大学に行ってから親しんだ東京を除けば、あとはすべてこのあたりを舞台にしたものばかりである。戦前から戦中、戦後にかけて、少年時代のある時期までの鵠沼については、路地や抜けみちの所在はもとより、原っぱや松林のすみずみから路傍の穴ぼこに至るまで、大げさに言えば一目一草に至るまで、私が知らないものは

なかった。

幼時の印象というものは鮮烈なものだから、いまでも夢に見るほどである。私にかぎらず、誰もがそういう土地を心に持っていることと思う。しかし、私の鵜沼はもうすっかり変わってしまった。変わらないのは、明るい空のけしきとざわめく海の水ばかり、といつてもいいほどだ。人間がふえてにぎやかになり、生活は便利になったが、そのことを恨む気持ちも私にはある。

それに、人がふるさとに寄せる気持は、ことに私のようにそこを離れずにいる場合は、なかなか複雑なもので、ただここが気に入ったとか、住み心地がいい、といったことではない。海辺の風光はたしかに好ましいが、古くから住んでいる人種はどうであらうか。正直に言つて、私は「鵜沼人種」というもの——仮にそう呼ぶなら——を好かない。これはもちろん、それを言う自分の中にも、その好ましからざる部分があるのを知っているからである。

小説を読む年頃になってから、鵜沼というこの土地が、かつて「白樺」の小説家や画家とか芥川龍之介や宇野浩二、戦後は安岡章太郎といった作家と縁故が深かったことを知つた。そういえば、芥川の遺族が疎開して来ていた西海岸の家にも、子供の私はひんぱんに出入りして木に登ったりしたし、例の東屋の庭にも侵入してトンボを追い回したりしたものだ。あのころもつとよく見ておけばよかったと残念な気がするが、子供の私は、将来自分が小説を書くなど、ゆめにも思わなかったのである。

私の鵜沼 各務クリスタル製作所会長 各 務 鑛 三

鵜沼に住むようになって早くも35年になりました。次男が体が弱くて静養のため辻堂の海岸近くに住まわせることになり、週に一度くらい参りました。蒲田の自宅からの往復のたび藤沢の駅に入ると、空気が綺麗で味が甘い感じがして、同じ住むなら鵜沼がいいと思うようになり、辻堂に近い今の家に住むことになりました。当時は一歩出れば、辻堂行きの道も、畑や田が連なり、富士山も見え、誠に思ったとおりの良いところでした。

戦禍で蒲田の工場も住宅も焼けてしまったのですが、こちらに来てよかったと家族一同ほっとしました。家族のものはこんな遠いところから、東京へ毎日通うのは大変だといいますが、住み心地が良いために、とうとうそのまま生まれ故郷のように落ち着いてしまいました。当地には芸術家のすぐれた方が多く、幸いおつきあいさせていただき、色々良い勉強にもなり、若い新人の仲間にもはいつたり、菅沼五郎さんの「年末助け合い」等にもお手伝いさせていただいております。

戦争も終わり、手さぐりで平和に歩み出した昭和22年頃、今の海岸の通り（昔は遊歩道路とっていました。）を江の島まで、ほとんど車に出会うことなくのんびり行けましたが、海岸の松の枝は切られ、海の砂は道路までもり上がり、海岸に出たり道路に戻ったり散歩したものです。

今の車や人の雑踏を思うとき、今昔の感一しおです。また、引地川の堰止めには、孫と一緒に魚を沢山とつたこともありました。

畑や田んぼの散歩もつい昨日のように思っていたのが、鵠沼の発展ぶりの速さには目を見張っています。細かった田んぼ道は鵠沼新道となり、往来は激しく、ゆっくり海を見ることもできません。また、海岸通りには立派なレストランが軒を並べ、たまには裏道をポッポッ歩きながら新築なったマンションや、住宅を眺めつつ散歩を楽しんでおります。

当地に住んでつくづく海の有難さがわかりました。住居が海に近ければ勿論塩害の不利はあります。また、近頃は海水浴に来る人は僅かでしょうが、サーフィンをやる若い人は季節を問いません。かく申す私も80歳を越した今日では、何処に出かけるにも車に頼らざるを得ないので、偉そうなことはいえないのですが、とに角空気も川の流れも、海岸もきたなくなりました。しかし、海風は一夜のうちにNOXやSOXを吹き飛ばしてくれすし、海岸の汚れも沖合までは及びません。鵠沼はこれからも人口がふえるでしょうが、海岸を埋め立てでもしない限り、その速度これ以上急激なものとはなり得ないで、そのうちストップするでしょう。小田急も随分と乗客もふえ空地もすくなくなりましたが、海はまだまだ人間の破壊力をはるかに超越したものを失わないだろうと私は安心しています。

＃．文中の菅沼五郎氏は、彫刻家で、東図書館前の片山 哲先生の胸像は氏の作です

＃．筆者は日展参与で、クリスタル硝子をカガミ硝子という程、硝子工芸の第一人者です

懐かしい題を出されて、柄にもなくこの一文を御引き受けしました。私が鵠沼に住んでから、既に52年になる。藤沢町時代である。昔から文に歌に「松の里鵠沼」で知られた処である。蘆花の小説「思い出の記」の主人公菊地慎太郎は熊本から東上の途、藤沢に下車し、愛人保養の家を探して、赤埃の畑道を人力車で、片瀬山の山陰の道を辿って、海岸の東屋迄行くくだりがある。

戦前まではこのような風致も、道の所々に残っていたようである。慎太郎は愛人の住居を探し歩いて、折しも鵠沼の夏祭の太鼓の音が、空しく響き渡っている農村風景が写されている。私が昭和3年鵠沼に移って来た頃はまさにこのような風景であった。懐かしい描写である。私が移り住む前年の夏、片瀬西浜橋の袂に家を借りて避暑した。橋を渡って海岸迄の間は背丈程の小松が一面に生えていて、塩湯営業のような建物と、他に小さな家が二軒ばかりあるのみであった。この縁故で身体が弱かった家内は、東京に帰ることなく、翌年は現在の家を建てて、定住となったわけである。今の地、桜が岡一丁目、その頃は橘通りといつて、藤沢駅から家迄の一本筋の道は、僅かに江ノ電寄りの東側に、四軒しかなかった。あとは左右全部桃畑であって、下の方は黄色い南瓜の花が咲いていた。今の石上あたりから柳小路へかけて、一段の低地で、萱が一面に生えていた沼地であった。今も蓮池という名で、小さな池が残っている。この辺りは文学の歴史としても、“砥上ヶ原を過ぎて”という西行の一首が残っている。（砥上ヶ原は大庭在ともいい、この石上ともいわれている。）「しま松のかずの茂みに妻こめてとなみが原にお鹿なくなり。」である。

もともと鵠沼は東京横浜に近接する、家族療養の地であった。春になると松の花粉が緑側に真っ白く降りこぼれる風景であった。在住の大方は皆、健康上の故障の人が多かったようである。昭和の初め頃、藤沢東京間は汽車で一時間半の距離であった。二等車定期の通勤客吾々は、汽車会というものがあり、車内の一種のサロンであった。青年弁護士片山哲先生の若き日は、吾々の中の明るいホープであった。東京横浜の実業家に加えて、当時横須賀鎮守府の海軍さんが多かった。鎌倉に溢れた海軍さんは皆んな藤沢に住居を構えられた。藤沢発展の先鞭をつけたのは海軍軍人さんであったと思う。それにいま一つ特筆

せねばならぬことがある。それは県立湘南中学の開校である。初代校長の赤木愛太郎先生は氏独特の抱負を以つて、名門湘南中学の経営に身命を投げ打った人であった。当時已に地方より中央に転任する人達は、こぞって子弟の将来のため、湘南中学を目指して、住宅をこの藤沢鵠沼（鎌倉も同じ）に求めたのである。いいかえれば、日本の首都を動かす力即ち原動力になる知脳の一部人士が相当この藤沢鵠沼に集まり、それらのことが吸引力となって、今日の藤沢を盛大にした一因ともいえるのではあるまいか。

私の鵠沼 元「東屋」主人 長谷川 欽一

昔の鵠沼族と同じく私も御多聞に漏れず移住族の一人です。然し明治34年、数え年2歳の時、おやじが療養のため、東京から姉である「東屋」を経営していた長谷川栄を頼つて鵠沼に移り住んで以来、もうそろそろ80年になろうとしています。

東屋の名が出てきたので、先ず東屋の事から先に書くことにします。というのも、時々新聞その他で、鵠沼と云えばすぐ東屋のことが出て来ますが、間違つて伝えられている点が時々見受けられます。「それは違う」と口角泡を飛ばして抗議する程の事ではないと黙ってきましたが、私が書くとなると正確な事を書いて、次代へ残す義務がある様に思います。東屋の創業は、何時であったかは私の生まれる前の事なのではっきりしませんが、伊東将行氏と長谷川栄が力を合わせて経営し、発展させて行つた事だけは事実です。

位置は、今の料亭東家より一本東側の八百屋（矢折）の道を入つた突き当たりの東南一帯（永井邸より海岸寄り）の五千余坪がそれでありました。

伊東将行氏は、もっぱら鵠沼開発の仕事に専念し、栄は東屋を経営し、伊東氏の仕事に後顧の憂いの無いように盡くしたのです。

東屋の名義人は長谷川栄でしたが、栄が大正5年1月に急逝した際、伊東氏は栄の死後に伊東姓に入籍の手続きを取つてしまいました。当然遺産相続の問題が伊東氏と長谷川一家との間に起こりました。栄には子供が無く栄名義の東屋を継承する正当な嫡出氏が居ないので、両者の間で相続の話し合いが続きます。

話は少し前に遡りますが、私の父は鵠沼に移住した翌35年6月に病没しましたが、父は長谷川家のたった一人の男児であり、あと9人は女ばかりであったので、私は数え年3歳で長谷川家を継ぎ、なにがしかの財産を持つて栄の家で養われる事になり、生母は里に帰り再婚しました。

その当時、鵠沼に来て栄の商売を手伝っていた長谷川の一族は、私に東屋を継がせるべく伊東氏と話し合いが続き、やっと円満に私が東屋の名義を相続する事になりました。その後の東屋は大正12年の大震災迄は多少の「いきさつ」は有りましたが、順調に経過していきました。震災で東屋の建物は全壊し、フランスに留学していた私も呼び戻され復興したのですが、その後経営に不向きの私は、昭和13年東屋を廃業致しました。その際には、町内会の皆さんから鵠沼から東屋が消えるのは寂しいと言われたものです。

戦後に入り、当時の鵠沼ホテルさんが、この地に「東家」の名を残すのだと、その名を使われるようになったと聞いております。

先頃の朝日新聞に、料亭東家の裏門であったかの如く、写真と記事が掲載されていましたが、これも誤りの一例で、これは私が復興した東屋の残された遺物の一つです。「私の鵠沼」でなく「私と東屋」になってしまいましたが、夏の海岸での「夏の会」の催し、烏帽子岩や江の島への遠泳、舟遊びの思い出等数限りが有りません。

大正13年には、その当時としては数少ない硬球のテニスコートを二面、敷地の一角に造り、鎌倉（海浜）ホテルのコートと両方使ったの「鎌倉トーナメント」を開催、数多くのテニスの名士が出場され、私もその一員としてプレーした思い出、又昭和5・6年頃始めたゴルフに、人影まばらな砂浜で片瀬海岸までボールを打ちながらの練習で腕を磨いた事等思い出は盡きません。しかし、紙面にも限りのある事とて心を残しつつ筆を擱きます。

私の鵠沼・関東大震災前後の鵠沼 医師 富士 山

私は大正11年9月初め鵠沼（今の松が岡3丁目）へ母と二人で移住して来て保養かたがたささやかな診療所を開いた。この年は無事にすぎ翌大正12年1月下旬妻をむかえ、

母は郷里へ帰った。その頃の当地は一区画5千乃至1万坪に家一軒というところが多く、一面の松林で静かな療養にもつてこいの処であった。春になるとさすがに気分がよく、来診患者は少ないが往診がそこそこあった。夏が近づくと付近の貸し別荘にも人が入りこみ賑やかになって来た。8月初め岸田劉生から往診の依頼があった。当時、岸田は今の小田急鵠沼海岸駅の下踏切りから湘南学園へ通ずる道の中程に住んでいた。八・九歳位の娘が腹工合がわるいので十日程毎日のように往診し治った。これが例の麗子像のモデルである。また8月は東久邇宮妃が吉村邸（今の髙橋邸）で御避暑というので町中大騒ぎであった。（地震で皇子がなくなられ、邸の南隅に皇子碑が建ったが今は碑がなくなり平屋の民家となっている。）8月も終わり翌9月1日になった。朝から無風で蒸し暑く食欲もなかった。正午頃突然激しい上下動の地震がおこった。妻と二人で西向き廊下の隣り、空の押入れの紙扉を背にして座し、地震のやむのをまつていたが、地震は一向にやまず遂に家は南側に倒れ、空の押入れが頭の上にかぶさった。押入れの壁が破れたのでそこから無事外部へ脱出した。井戸の中から泥水が溢れ出ている。付近の家はあちこち倒れている。”津波がくるぞ”との声で北方の小高い松林へ逃げた。既に二・三十人集まっていた。夕方になり我が家に帰り無事であった。トタン葺き六畳の物置き小屋で泊まった。後で知ったが津波は地震後一時間位でやってきたという。翌2日晴、たえず小地震がつづく、付近の被害状況等を視察した。津波の終末の痕跡は今の熊沢屋の前までつづいていた。夕方朝鮮人の内乱隊がくるというので、町の人々は今の湘南学園付近（当時は今の桜が岡にかけて家なき一面の松林であった。）と江の電鵠沼駅付近に避難したが、何事もなかった。

この地震で死亡した人は50人位、火事は一軒だけだった。大地震による教訓として、倒れた家は瓦葺きが大部分であった。トタン葺き平屋にするのが一番安心と思っている。当時は水道もガスもなく、火事がなくて幸いであったが、今はガス、プロパンがあるから火事を出さないことが一番大切と思う。

大正14年頃から一面畑であった所に道路もでき、住宅も新築され追々賑やかになった。大正15年7月27日復興した東屋（今の東家ではない）から芥川龍之介の往診を頼まれ40日許り治療した。9月中旬だったか、東屋近くの龍之介の転居先へ往診した。3歳位の次男たかしを診察した。彼は太平洋戦争で戦死した。長男ひろしは5歳位、三男やすし

はまだ赤ん坊であった。秋には川端康成が芥川の紹介で受診にきた。同年12月末、大正天皇がなくなられた。

昭和2年4月上旬、今の斉藤医院あたりは一面の松林であったが、そこで龍之介の散歩姿にあった。病状をきいても返事がなかった。それから三ヶ月ほどたつて7月24日龍之介は田端の自宅で自殺した。私の初診以来まる一年後である。龍之介については、まだまだ書くことがあるが、余白がないから止めにする。大震災後の鶴沼についてもいうべきことがあるがこれも割愛する。

私たちの鶴沼公民館 日本画家 黒崎 義介

鶴沼公民館が出来る頃の海岸通りは如何にも避暑地の小さな町といった感じで、人影も少なく、店舗も今みたいに軒を並べているのではなく、菓子屋にしても只一軒、中野饅頭屋があったきりで、その対いの大沢肉店の処に、この町唯一のコンクリート造りの間口六米位の横浜銀行がデンと？構えていたのが際立ち、用品雑貨屋などなくて、糸一本買うのにも藤沢まで行かねばならなかった。土曜になると土曜相場といって、魚・肉・野菜など値上げしたもので、恐らく別荘地帯だった頃の風習が残っていたものと思える。

魚久の二三軒手前にパチンコ屋が出現したが、客が入っているのを余り見たこともなく夏休みが終わると跡形もなく消えてしまった。また、いまの相鉄マーケットの所に洋菓子兼喫茶店ができたが、菓子を買う人はたまにあつても、喫茶部でのお客さんは殆ど見かけなかった。これは各家庭で美味しいコーヒーが喫めるからだったのではあるまいか。

こうした静かな或る日の散歩に、大がかりの基礎工事が始まったのには驚いたものだ。これが公民館だときいたときは半信半疑だった。東京から移住してきたばかりの私には、東京には公会堂、町会事務所はあつても公民館というのは耳新しかった。

とにかく木造とはいえ白亜の立派な建物が落成したとき、私はここで何かをやらせて頂きますと勝手に心に誓ったものです。そしてこの立派な建物が、地元商店の方たちの厚意であることを聴くに及んで、猶更いいことをしなければと思った。

丁度この頃市民美術会が発足して、その手始めに会員が協力しての春と夏の休みに「よい子の絵画教室」、一月の新年こども大会の餅搗き、五月のこどもの日の鯉幟り作製と、それにこの二つの行事にはいつも宝ビスケット社長岩崎裕彦さんより子供たちへと、特製の美味しいビスケットを寄贈して下さり、このビスケットの袋を嬉しそうに抱きかかえて帰る子供たちの姿も、この公民館だけしか見られない風物ではないだろうか、この風物もこの公民館の歴史と同じ古さである。ここで私は、長年こころよく子供たちにと数百袋のビスケットを寄贈して下さる岩崎社長さんに紙面を借りて厚く御礼申し上げます。・・・

去る昭和55年5月25日の「初代公民館をしのぶ会」で私は、藤沢市が全国でも優秀なる文化都市と称えられる所以の母体は、この鵠沼公民館であると述べました。藤沢市には文化人が多く居住しています。特に鵠沼には、・・・・然しただ文化人が居住しているということだけだったら文化都市とはいえないでしょう。幸いにここの文化人の方達は心がけが宜しく、社会奉仕の念に厚く、加えて鵠沼公民館という素晴らしい場所があり、この場所をフルに使っての文化活動をし、またこれを受ける住民受講者の方達も真摯にこれに応じたのであります。この活動が実って文部省より全国初の公民館賞の表彰を受けたことは衆知のとおりで、この理由で私は藤沢が文化都市と称えられる母体は鵠沼公民館であると信ずるのであります。

ここでこの館の歴代館長以下職員の皆さんが、住民の為の公民館ということ意識しておられて、他の公民館に見られない和やかな何か家庭的な雰囲気をかもし出しているのは私の知る限り藤沢市ばかりでなしに、ここの鵠沼公民館だけだといっても過言ではありません。

その1・おわり

「鵠沼」平成2年9月55号

平成2年 9月11日発行

鵠沼の光と影 その一

発行所 鵠沼公民館

藤沢市鵠沼海岸2-10-34

電話33-2001

編集鵠沼を語る会 代表

塩沢務

藤沢市鵠沼海岸3-12-33

電話36-7876